小さなからす　フランス

昔むかし、あるところに、三人姉妹がありました。父親は、病気で目が見えませんでした。
ある日、一番上の娘が、泉へ水をくみに行きました。すると、泉のそばで、小さなからすに会いました。からすは、
「きれいな娘さん。お父さんの目を治したいなら、わたしと結婚なさい。いやなら、あした同じ時刻に、あんたの妹をここに連れていらっしゃい」といいました。
娘は家に帰ると、父親に、からすのいったことを話しました。
「お父さんの目を治したければ、わたしと結婚なさいってからすがいったわ」
父親は、
「おまえの好きなようにおし」といいました。娘は、
「あのからすは、あまりにもきたないわ。わたしはいやよ。明日、妹を連れて行きましょう」といいました。
つぎの日、ふたりの娘は泉に水をくみに行きました。すると、からすが待っていて、
「あんたたちのうちのどちらかが、わたしと結婚したら、お父さんの目は治るよ」といいました。
上の娘は、
「わたしはいやよ」といいました。妹も、
「わたしもいやよ」と答えました。からすは、
「それじゃあ、家にお帰り。そして、あしたまた同じ時刻に、末の妹を連れていらっしゃい」といいました。
ふたりが家に帰ると、父親は、
「目が治るのはうれしいけれど、おまえたちが無理して結婚することはない」といいました。
「じゃあ、あした、妹がからすを気に入るかどうか、みてみましょう」
つぎの日、三人の娘たちは泉に水をくみに行きました。すると、からすが待っていて、
「わたしと結婚したら、お父さんの目は治るよ」といいました。末の娘は、
「お父さんの目が治るなら、わたしはあなたと結婚したいわ」といいました。からすは、
「それなら、あした、結婚に必要なものをかばんにつめて、ここにいらっしゃい」といいました。
娘たちが家に帰ると、父親の目は開きました。
つぎの日、末の娘は、かばんを持って泉に行きました。そこに、からすが待っていました。娘は、

からすの片足にかばんを結びつけて、つばさに乗りました。からすは、舞い上がりました。
半時間も飛んで行くと、大きなお城に着きました。もう夜になっていて、からすは、真っ暗な窓から部屋に飛びこみました。そのとたん、からすはりっぱな王子さまになりました。
一週間たって、娘は、親たちの家に行って、どんなに幸せに暮らしているか話しました。ふたりの姉さんは、たいそう悔しがりました。
ある夕方、姉さんたちがこっそりお城にやって来ました。そして、寝室に入りこんで、王子さまのつばさを見つけました。姉さんたちは、ろうそくをともして、つばさの上に、ろうをたっぷり流しておきました。
夜になって、王子さまは、いたんだつばさを見つけました。王子さまは、娘にいいました。
「ぼくは、このつばさを妖精から授けられたんだ。もしこのつばさをいためたら、ぼくたちは、十年の間、償いをしなければならない。ぼくはここからずっと遠い所で。きみは、このお城で。よくお聞き。あんまりつらいときは、きみはこういうんだ。
小さなからす　小さなからす
助けておくれ　お願いだ
それからきみは、ぼくのおばあさんの所へダイヤモンドを取りにやらされるだろう。そうしたら、七つのパンと七つの大きなほうき、七本の針と七つの小さなほうき、七本の油のびんを持って行くんだ。ダイヤモンドを持って帰って来たら、きみは、お城の中庭に連れ出されて、男たちの前を歩かされ、夫を選べといわれるだろう。最後の男がぼくだから、『わたしは、この人にします』といえばいい」
そうして、王子さまはお城を出て行きました。
つぎの日、お城の男たちは、娘に、堆肥を馬車五十台分積みこむようにいいつけました。娘は泣き出しました。やっと一台分を積みこんで、疲れはてたとき、娘は、王子さまのことばを思い出していいました。
小さなからす　小さなからす
助けておくれ　お願いだ
すると、森のあちこちから、からすの群れが飛んできて、三時間もしないうちにぜんぶの堆肥を積み終えました。夕方、男たちが仕事の進み具合を見に来て、おどろきました。
つぎの日、男たちは、娘に、五十台の堆肥をぜんぶ牧場に下ろすようにいいつけました。娘は、牧場に行くと、いいました。

小さなからす　小さなからす
助けておくれ　お願いだ

すると、森のあちこちから、からすの群れが飛んできて、二時間もしないうちにぜんぶの堆肥を下ろしてしまいました。夕方、仕事の進み具合を見に来た男たちは、たいそうおどろきました。そしで、こんどは、王子さまのおばあさんの所へダイヤモンドを取りに行くようにいいつけました。

つぎの日の明けがた、娘は、七つのパンと七つの大きなほうき、七本の針と七つの小さなほうき、七本の油のびんを持って出かけました。

長い長いあいだ歩いて行くと、七年前からひとつのパンを争って、道をふさいでいる七匹の犬に会いました。娘が、みんなにひとつずつパンを分けてやると、犬たちは、娘を通してくれました。

丘を越えて少し行くと、七年前からひとつのほうきを争って、道をふさいでいる七人の女に会いました。娘が、みんなにひとつずつ大きなほうきを分けてやると、女たちは、娘を通してくれました。

もっと行くと、七年前から一本の針を争って、道をふさいでいる七人の仕立屋（したてや）に会いました。娘が、みんなに一本ずつ針を分けてやると、仕立屋は、娘を通してくれました。

またもっと行くと、七年前からほうきではかれたことのない、大きな石の階段の下に着きました。娘は、小さなほうきで階段をはいて、くもの巣を取ってやりました。

階段を上ると、おばあさんのお城がありました。お城のとびらは閉まっていて、七年前から油をさしてありませんでした。娘がていねいに油をさしてやると、とびらはひとりでに開きました。

中に入ると、また七年前からはかれたことのない大きな階段がありました。娘は、小さなほうきで階段をはいて、くもの巣を取ってやりました。それからまた、七年前から油をさしていないとびらがありました。娘がていねいに油をさしてやると、とびらはひとりでに開きました。こうして、娘は、七つの階段と六つのとびらを通って行きました。

どんどん上って階段のてっぺんに着くと、おばあさんの部屋のとびらがありました。このとびらも、七年前から油をさしてありませんでした。娘がていねいに油をさしてやると、とびらはひとりでに開きました。これで、七本の油はなくなってしまったし、七つの小さなほうきもすり切れてしまったので、娘にはもう何も残っていませんでした。

部屋に入って行くと、おばあさんが眠っていて、梁（はり）にダイヤモンドがぶらさがっていました。娘

は、いすに上がってダイヤモンドを取ると、急いで逃げだしました。おばあさんは、たちまち目を覚まして、さけびました。

とびらよとびら　早く娘をつかまえろ
階段よ階段　どろぼう娘をつかまえろ
とびらよとびら　どろぼう娘をつかまえろ

けれども、七年ぶりに油をさしてもらったとびらは、すっかりごきげんで、娘を通してくれました。七年ぶりにはいてもらった階段も、すっかりごきげんで、娘を通してくれました。

おばあさんは、起き上がって、娘を追いかけました。

娘が七人の女の所まで来ると、おばあさんはさけびました。

女よ女　どろぼう娘をつかまえろ

七人の女は、答えました。

「あたしたちは、七年前からひとつのほうきを争ってきたけれど、今じゃひとりにひとつあるのさ」

そして、娘を通してくれました。

娘が七人の仕立屋の所まで来ると、おばあさんはさけびました。

仕立屋よ　仕立屋　どろぼう娘をつかまえろ

仕立屋は、答えました。

「おれたちは、七年前から一本の針を争ってきたけれど、今じゃひとりに一本あるのさ」

そして、娘を通してくれました。

娘が七匹の犬の所まで来ると、おばあさんはさけびました。

犬よ　犬　どろぼう娘をつかまえろ

犬は、答えました。

「おれたちは、七年前からひとつのパンを争ってきたけれど、今じゃいっぴきにひとつあるのさ」

犬は娘を通してくれました。

こうして、娘はダイヤモンドを手に入れてお城にたどり着きました。

つぎの日、娘は、中庭に連れ出されました。そして、一列に並んだお城の男たちの前を歩いて夫を選ぶようにといわれました。娘が男たちの前を通ると、そのたびに、

「この男にするかね」ときかれました。

「いいえ」と娘は答えました。

とうとう最後に、ぼろぼろの服を着た男の所に来ました。
「この男にするかね」
「ええ、この人にします」
娘は、王子さまを手に入れました。
それからふたりは、結婚しました。今までだれも見たことのないようなすばらしい結婚式でした。

牧場に着いたぞ
トリック・トラック
わたしの話もおしまいだ

村上郁再話

資料『フランス民話の世界』樋口淳・樋口仁枝編／白水社